

ジャン・フィリップ・トゥーサンにインタビューのために会ったのは、彼の新作『逃げる』が発売されて12日後の火曜日だった。それから4日後の土曜日。冷たい雨の降る朝、都内のメトロの駅から車内に乗り込むと、なんと！目の前にトゥーサンが座っているではないか。笑いこぼして3つ目の駅で彼は長いコートを翻して降りていった。こんな偶然に出会おうと、マリーという恋人がいながら、北京に向かう夜行寝台の上から下りてきた脚に導かれて、窮屈なトイレでもがきながら互いの下着を脱ぐ『逃げる』の主人公「ぼく」の偶然の恋が信じられてくる。

だが、マリーからの携帯はその恋を中断し、マリーは地中海に「ぼく」を呼び寄せ、荒々しく、ぞんざいに「ぼく」の性器を扱う。

絹の手触りの官能的な恋に、触れれば毛玉が出そうならついたベッドシーン。トゥーサンはひとつも手加減せず、その2つのセックスをことごとくかに描写して書きつくす。

映画監督より作家の人生を。

「個人的な体験や文学的な体験も積み重なって成熟し、40歳がぼくにとつてはエポックメイキングな歳になったと思う。それまで、セックスについて書

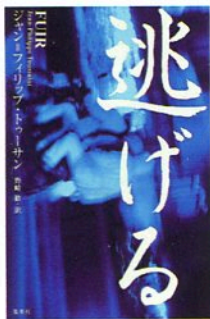
かなかったほうが、前作『愛しあう』、新作の『逃げる』でセクシュアルな表現を赤裸々に展開しているからね。『愛しあう』なんて、日本語ではおとなしい表現だけど、フランス語ではそのまま『ヤル』という意味だからね。セックスを書くにあたり、慎重深くしようと思っただけ、それでもなまなましく書きたーいと思っただけ。描写はいちばん大切なことだし、こまかいところまで正確に書くことをこころがけたんだ。おかげで、しっかりと哀愁のある文体ができ、ぼくはようやく作家をやっつけていく自信がついた」

実は、それまでトゥーサンは映画作家としても知られていた。自作の『ムッシュー』『カメラ』『アイズリンク』を自分で監督して、映画作品も作った。

「90年代は、ぼくにとつてベシミスティックな時代だった。文学の未来に対して、とても懐疑的だった。が、いまは違う。『愛しあう』『逃げる』を書いて、文学には他の芸術にはないすばらしさがあることを確認でき、文学の可能性を強く感じられるようになった」

大切な描写は「お茶を煎じるようにして、観察したいくつものイメージが発酵し、よい香りを放つのを待つて使っていく」のだそうだ。

インタビュー・文／和久本みさ子



恋人マリーに託された大金をもってパリから上海へ……。現地で知り合った中国人女性とマリーの間で、セクシュアルな大人の愛が疾走する。『逃げる』(集英社刊) ¥1680(税別)

Jean-Philippe Toussaints

1957年11月29日、ベルギーのブリュッセル生まれ。78年にパリ行政学院を卒業。作家デビューは、85年発表の『浴室』。その後同書は映画化された。90年には『ムッシュー』、続いて『カメラ』(96年)を発表。この2作は自ら監督し映画化した。彼の小説は20カ国で翻訳されるなど、フランス人現代作家として人気を博している。日本を舞台に男女の愛と別れを描いた『愛しあう』(03年)を世に出し、続編にあたる本作『逃げる』で05年度の仏メディアシス賞を獲得した。